

「神に結ばれる家族の絆」

出エジプト記 20 章 12 節

聖学院中学校・高等学校チャプレン 久保 哲哉

なぜ聖学院で「母の日」を大切にしているのか。それは、この「母の日」がキリスト教の教会から始まった行事であり、学校にとっても大切な意義があると私たちが考えているからです。

まずは母の日の起源について紹介しましょう。今から約 100 年以上前のことです。アメリカの教会にアンナという少女がいました。そして、そのアンナのお母さんは子どもの教会の先生でした。

ある日、アンナのお母さんが教会の礼拝で、出エジプト記の「父母を敬え」という聖書箇所から、教会の子どもたちにメッセージを語りました。きっと、娘アンナの心に「お父さん、お母さんを大切にしてください」という母からのメッセージが心に刻まれたことでしょう。それから、数十年の時がたち、アンナのお母さんがこの地上の生涯を終え、天国に旅立ったときのことです。愛する母との別れですから、その時のアンナの悲しみを想像すると、胸が苦しくなります。けれども、幼い頃に母から聞いた「父母を敬え」というメッセージに従い、母が好きであったカーネーションで教会を飾り、記念会を行ったとされています。これが母の日の始まりの出来事です。愛する母親を失い、悲しみに満ちたアンナの心が、主なる神によって支えられ整えられることで、天を見上げて、感謝をささげ、母が好きだったカーネーションで教会をいっぱい飾り、これまでの感謝を態度で示す強さに変えられました。この母の日の始まりの物語に魅力を感じるのは私だけではないはずです。

それでは、聖書には「父母を敬え」とありますが、どのようにすればよいのでしょうか。これを知るために、今日はイエス・キリストが 12 歳であったときの少年時代の出来事を朗読しました。

主イエスの家族は「過越祭(すぎこしさい)」という祭りの時期になると毎年エルサレムの神殿で礼拝をささげるということを習慣にしていました。礼拝を終えて、両親が帰ろうとしたときに、少年イエスとはぐれてしまったことが聖書に記されています。突然愛する息子がいなくなってしまったのですから、主イエスの父ヨセフと母マリアは本当に心配したと思います。それで三日の間、エルサレム中を探し回りました。私も、もし自分の子どもがいなくなったら三日三晩、見つかるまで探し続けると思いますが、ここに、親の愛があります。親が子を愛し、その愛に対して子は親を敬う。これが、聖書的な親子の関係というものです。

この親の愛について考えるとき、触れたいことがあるのです。それは、今から 13 年前の東日本大震災のときのことです。私事ですが、久保家の長女が4月に出産予定だったため、妻が出産のための最後の準備のために、臨月のお腹で買い物をしていたとき、地震が起こりました。

地震直後は道路は大渋滞。電車も全線停止。電話もメールもすべて通じません。連絡手段が何もないのです。

東日本大震災が起こったとき、私は妻とは別のところで仕事をしていましたから、本当に焦りました。

なぜなら、もしそのような中で、妻のお腹の中の長女が地震でびっくりして、産気づいてしまったら、路上での出産、ということになるでしょう。それは、母にとっても子にとっても命の危機を意味します。

けれども、遠く離れている私には何もできることはありませんでした。ただ主なる神に祈ることしかできなかつたことを思い出します。そのとき、妻はどうしたのかというと、お腹の赤ちゃんの命を守るため、病院に近い自宅に帰った方がよいと判断し、お腹を抱えながら歩くことを決めたと聞きました。私は家で祈りながらご飯を作って待っていましたが、地震が起こってから6時間以上たってから、無事に再会することができたとき、主なる神と妻に感謝したことを昨日のこのように覚えています。そのときに子どもの命を守り育むために命をかける母の愛と強さを知りました。親というものは子どものために「仕える」ものなのだと知りました。皆さんのお母様も、お父様も愛する子どもを思う気持ちは同じだと思います。

しかしながら、同時に家族というのは本当に難しいとも思います。というのも、人生は山あり、谷あり、色々なことが起こります。家族と一緒に暮らしていると、どうしても家族に対して素直に感謝を言えないときがあるのです。

また「親しき仲にも礼儀あり」とはいいますが、家族内であっても、いや、家族だからこそ、様々なストレスや不安や緊張で心が堅くなることもあるのです。また、堅くなるどころか、心からトゲがチクチクと出てきてしまう。そして、口から出る言葉が、手の行きまでが、トゲトゲしてくる。そういうときはないでしょうか。

家族という極めて近い関係にあるからこそ、互いにぶつかり合ってしまうということも起こるのです。しかし、主なる神に礼拝を捧げ、神の言葉を聞くと何が起こるのか。

不思議と、この心のトゲが抜けて、愛が芽生えるのです。そして礼拝を通して、私たちの、乾いて堅くなってしまった心に神の力が働くことで、心がまっすぐにされるということが起こるのです。さらには、あのアンナのように、この世ではもう母と会うことができなかつたとしても、天国の母との絆を神が結んで下さるということもまた、本当のことです。両親が近くにいたとしても離れていたとしても天国までも感謝は届くのですから。感謝を伝える手段はいくらでもあるのです。

最後に、聖書に目を向けますと、愛の心でイエスを捜し当てた両親は、やっとの思いでイエスを見つけたときに、イエスはなんと、両親の心配や苦労など構わずに、神殿の境内で学者たちと学びあっていたと記されています。大事なのは最後の言葉です。

「それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。(ルカ 2・51～52)」

ここには少年イエスは「両親に仕えてお暮らしになった」とあります。仕える、というのは、助けるとかサポートするという意味です。父・母は、無条件に子どもに愛を注ぎます。その家族の愛に応じて、子は「両親に仕える」のです。これが、聖書的な家族のあり方です。

そうすると、不思議と心が整えられ、神と人ともに愛される、そんな人生を進み行くことができるのです。

両親からも、神からも、存分に愛を受けて、元気に進みゆくことができるのだと聖書は語っているので
すね。

小さなことでよいのです。聖書の言葉に従い、
子は、両親に仕え、感謝を表しましょう。あのイエスのように、知恵が増し、背丈も伸び、神と人
とに愛されて、生き生きと生きる道。Only One に至る道がここに
あります。

天の父なる神よ。あなたの御名をたたえます。
今日、このように母の日を祝う日が与えられました。感謝をいたします。

どうぞ、聖学院に連なる家庭をあなたが祝してください。互いに支え、愛し合い、この困難な
ときを乗り越えることができますように。導いてください。

愛する主・イエス・キリストの御名によって祈ります。
アーメン。

2024年5月15日 聖学院中学校・高等学校母の日礼拝